防災パビリオン

～1.17 から学んだ地域の絆～

宮っ子パネル展示内容

（一部抜粋）

○阪神大震災のつめあと（クロッキー）……P.2～P.7

○「近畿地方に多い活断層」等……P. 8～P. 9

○阪神大震災復興特集……P. 10～P. 11

○宮っ子復刊までの足取り……P. 12～P. 13

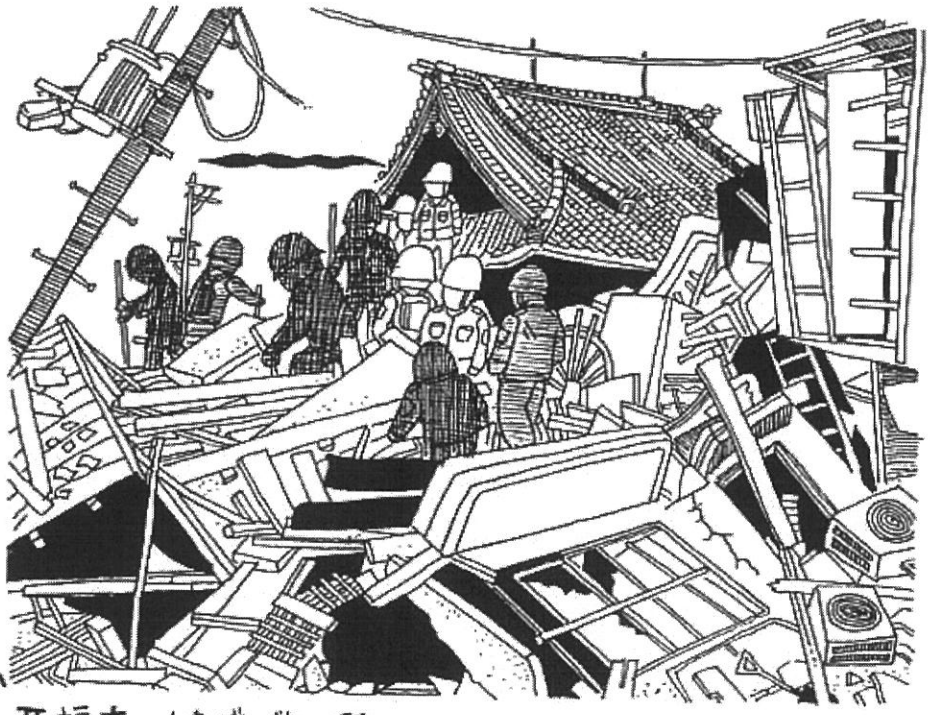
○宮っ子今津地域版（震災特集号）……P. 14～P. 15

阪神大震災のつめあと

(上)

絵と文・伊藤太一

いまだかつてない衝撃の巨大地震に襲われました。あの日、一九九五年(平成七年)一月一七日未明午前五時四六分。生と死の戦慄と恐怖は体内深く刻みこまれました。その反面、人間のこころのすばらしさ、たくましさを痛感しました。さらに自然に対する畏敬心も。あの町かど、あの場所をクロッキーしました。



西福寺　自衛隊の救助活動
(西福町)

自衛隊の災害派遣隊
(津門仁辺町)

★自衛隊は大規模倒壊現場や行方不明者の捜索活動、給水活動はじめ生活支援に力を注いでくれました。

ホーキビル倒壊
(甲子園口北町)

原形をとどめないほどに崩壊……。

屋根落下
(霞町)

崩れ落ちた家屋の中から懸命の救出作業に手をさしのべる付近住民の人々。

津門小学校付近
（津門呉羽町）
生活用水が絶えない……。
井戸水をもらう人、人、人の長い列。

負傷者を布団や毛布でくるまって救出。（屋敷町）

コープ香林園（川東町）
食料品・生活用品を求め長蛇の列……。

けが人救出

とても手のつけられない非常時に、人々は助けあい、はげましあって市民生活を徐々にとりもどしていきます。

笹生病院（5場町）
けが人が続出。治療を待つ人々が列をつくりました。野戦病院さながらです。

阪神大震災のつめあと

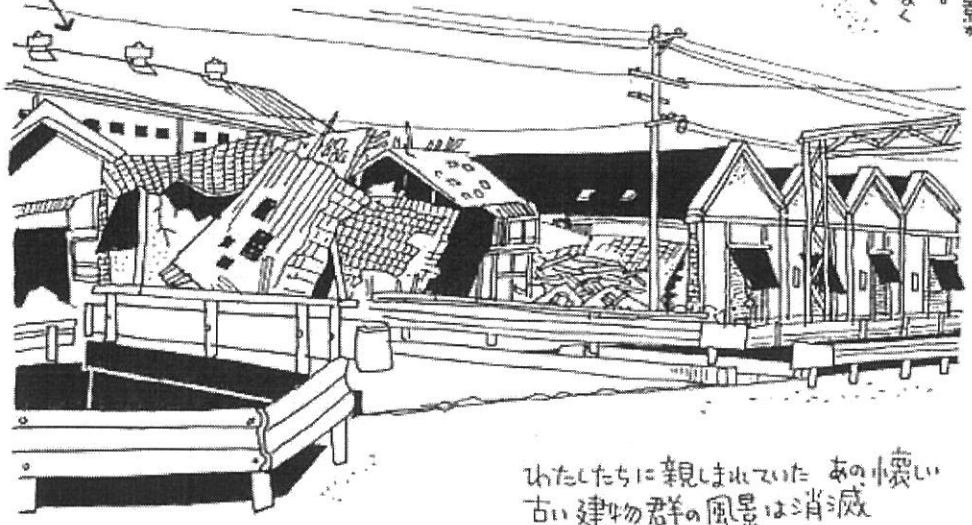
(中)

絵と文・伊藤太一

あの町が、この建物が、見慣れた場所の風景が、激震によって考えられない壊れ方をしました。暮し住んでいる身近な地域の町づくりを、考えなくては……。そう思いながら クロッキーを、つづけてみました。

1階が押しつぶされ無残な姿をさらす

木手前女子大学（御茶家所町）



辰馬本家酒造 精米工場（建石町）

わたしたちに親しまれていた あの懐しい古い建物群の風景は消滅しました。

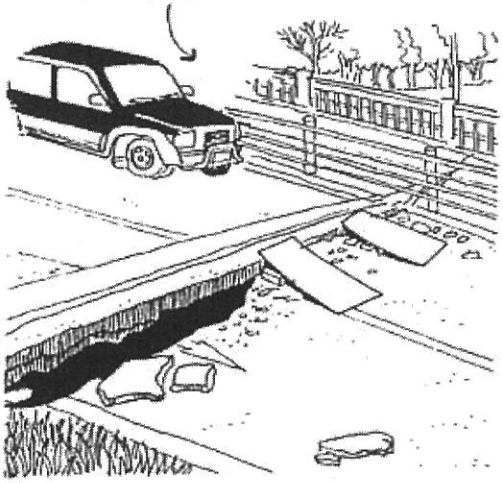
崩れ落ちた民家（荒木・上之町付近）

傾いた店舗と毛布に身を包み避難する人……（今在家町）

今津 浄願寺（津門呉羽町）
礎盤に亀裂、台輪は折れ 屋根はくずれ
歴史的な建築物も哀れ崩壊。

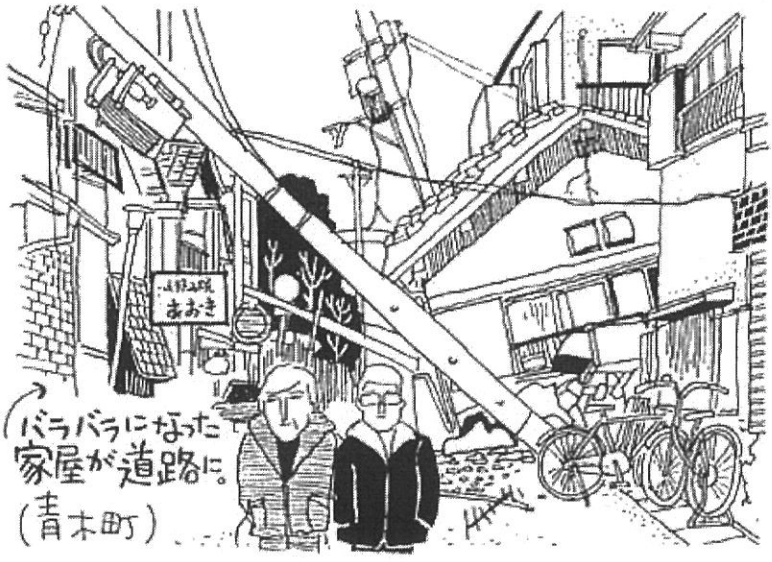
神呪寺（甲山町）
「甲山大師」の御堂
大棟を向拝を ハ
しゃげ崩れています

激震で道路が陥没、段差ができた



夙川橋（国道2号線（上り））

ニテコ池（満池谷町）北側の道路で。
大きな亀裂が道路を寸断しました。



バラバラになった
家屋が道路に。
（青木町）

不安を胸に寒空の下に避難……。
北口市場前
駐輪場
（北口町）

阪神大震災のつめあと

(下)

絵と文・伊藤太一

――はじめは涙が出ました。言葉もありません。でもモノは考えようです。電車が走ります。仮設住宅も並べます。みんな元気になりました。大震災後六ヶ月余り、懸命のご努力で、もくもく立ちあがりつつあるあの町。この町。被災地をたずねつづけたクロッキーは、復興へのシンフォニー ポエムでもあります。

災害対策本部

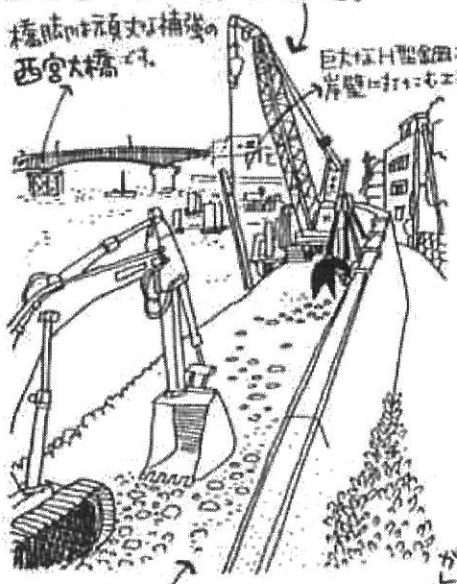
市庁舎2階に設置されている災害対策本部。

震災直後は被災した人々で大混雑しました。

護岸の災害復旧工事が進む旧西宮港。

橋脚が頑丈な補強の西宮大橋です。

巨大な鋼管杭を岸壁に打ちこむ工事現場。



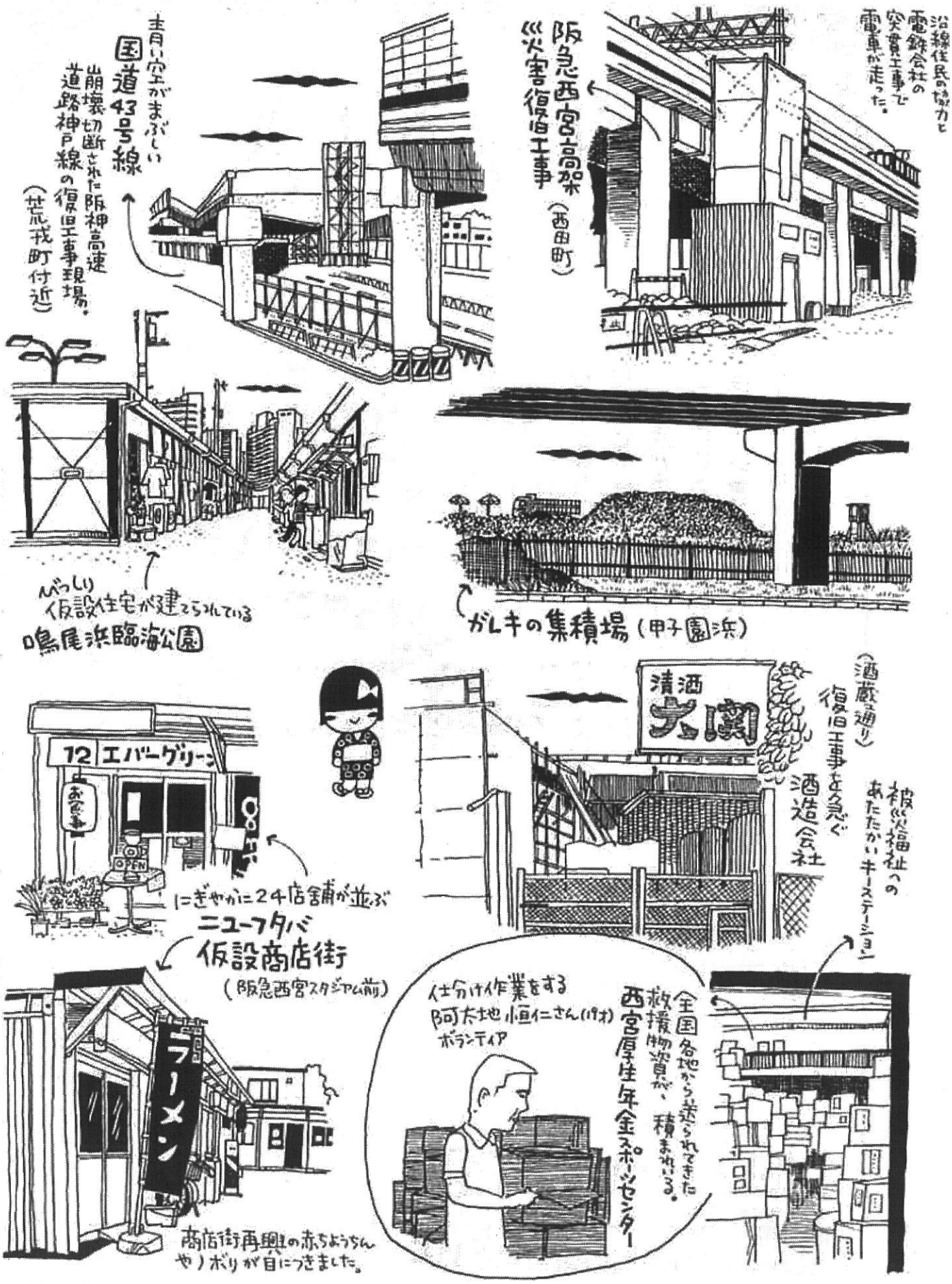
第2仮設庁舎

1階 土木局 倒壊家屋等対策室。

ガレキを満載したトラック

港も駅も大きなパワーで活気が戻ってきます。

駅舎の建物は消えたが……通勤通学の人々で活気がよみがえった阪急夙川駅改札口。


沿線住民の協力と
電鉄会社の
突貫工事で
電車が走った。
阪急西宮高架
災害復旧工事（西田町）
青い空がまぶしい
国道43号線
崩壊切断された阪神高速
道路神戸線の復旧工事現場。
（芦北町付近）
ぴっしり
仮設住宅が建てられている
鳴尾浜臨海公園
ガレキの集積場（甲子園浜）
清酒
大関
（酒蔵通り）
復旧工事を急ぐ
酒造会社
被災福祉の
あたたかいキーステーション
12 エバーグリーン
お宮参
にぎやかに24店舗が並ぶ
ニューフタバ
仮設商店街
（阪急西宮スタジアム前）
全国各地から送られてきた
救援物資が、積まれる。
西宮厚生年金ボランティアセンター
仕分け作業をする
阿太地 恒仁さん（パオ）
ボランティア
ラーメン
商店街再興の赤ちょうちん
やノボリが目につきました。

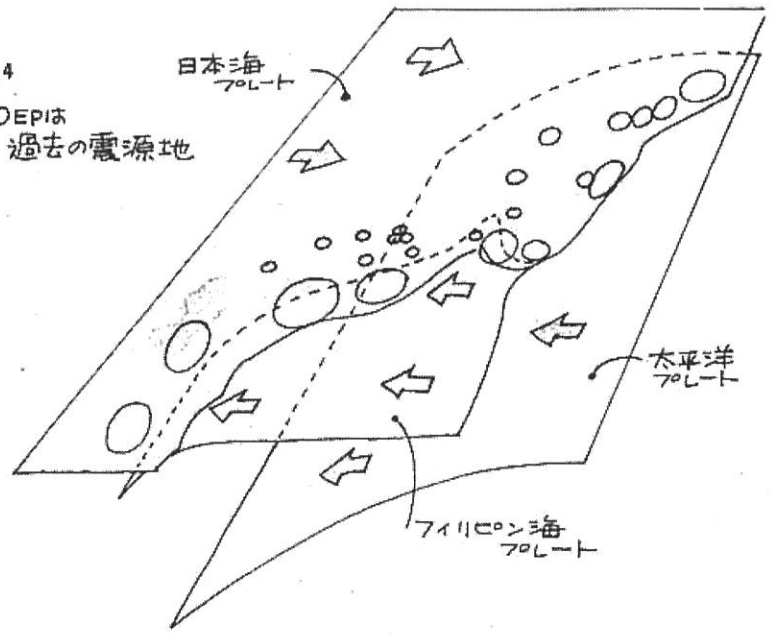
日本は"地震列島"恐ろしい直下型地震

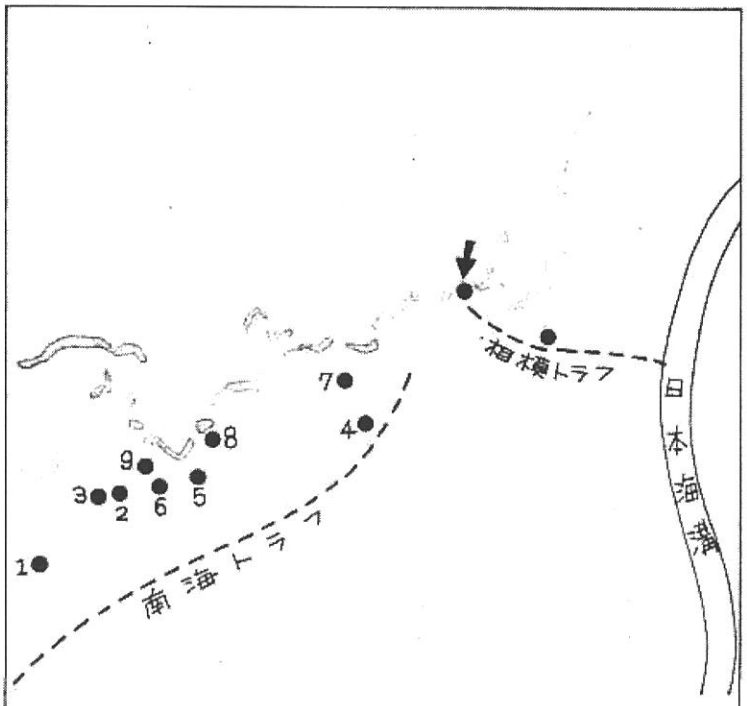
こうしたマントル対流に引きずられて動く、何枚かのプレートの動きによる相互作用の結果として、地震、火山の噴火、造山運動、大陸の移動などのもろもろの地学現象が起きていることが最近になって分かってきました。このように地球は生きて活動しているのです。

日本列島はご存じのように、弓なりに折れ曲がっていますが、これは周囲を取りまいている太平洋プレート、フィリピン海プレート、日本海プレートの三つのプレートにはさまれ、そのうちの日本海プレートの拡がる圧力に押され長い年月の間にこうなったのです。（図一四）

海底のプレートは陸地を乗せたプレートに出合うと、その下にもぐり込みますが、この時図

図4





南海トラフトに沿った大地震　番号は表1の地震番号に対応する。

図6　日本南西部の海底大地震の震央分布

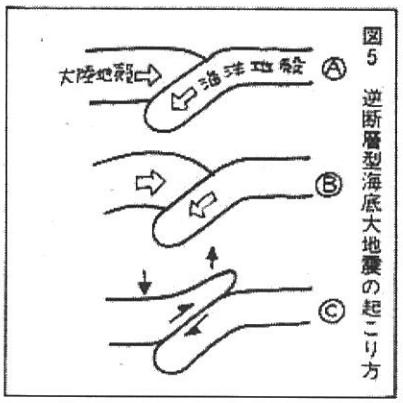


図5　逆断層型海底大地震の起こり方

表1　東海道から四国沖にかけての歴史的大地震

地震名	年月日	マグニチュード
1. 天武	684 XI 29	7.9
2. 仁和	887 VIII 26	8.1
3. 正平	1361 VIII 3	7.9
4. 明応	1498 VIII 16	8.1
5. 宝永	1707 X 4	7.9
6. 安政	1854 XI 4	7.9
7. 安政	1854 XI 5	7.9
8. 東南海	1944 XII 7	8.0
9. 南海	1946 XII 21	8.1

—五のようにプレート上の大陸地殻はだんだんとたわんできて、それがある弾性限界に達したとき急にはね返って、逆断層的なスベリが生じ大地震が発生します。

これまでに関東以西で発生した大地震を調べてみますと、いずれも図—六のように日本列島のすぐそばの南海トラフおよび相模トラフに沿って多発しています。（図の矢印が関東大地震）。さらにこれらのプレートの圧力は日本列島自身にも影響を与え、陸地内部にある多くの活断層（繰り返し活動しては地震を起こす断層）を再び活動させて、一番恐ろしい直下型地震を発生させているのです。

予測される東海沖大地震

ところで、大地震の起こるかなり前から、陸地部分はあるきざしが現われます。昭和四十八年六月に発生した根室沖地震（マグニチュード七・四）の前に、長期にわたって北海道東端のゆるやかな沈降と合わせて、根室付近に北西—南東向きの地殻の縮みがみられ、南方沖の海溝で逆断層による大地震が近づいていることを示していました。そして懸念されていた通りの大地震が起こったのです。

これと同じ陸地の沈下やゆがみが、現在駿河湾全体でも発生していて、マグニチュード八クラスの大地震が今起こっても不思議でない状態になっているのです。

関西も要注意

この予測結果によって東海地方や関東では各種の地震対策がとられているわけですが、それがもし起こったとしても、関西地方へのこの地震の直接の影響はごくわずかです。だからといって我々は今安心していられない理由が実はあるのです。

表—二は南海沖で発生した地震と東海沖地震とを比較したものですが、五回起こった東海沖地震のうち、実に四回まで同時または一年後に南海沖に地震を起こしているという事実がそれです。このことからも、東海地方と同じ程度に我々も注意し、対策を講じる必要があると思います。

表2　南海トラフト内側地震の地域別発生年時表

（※印は、兵庫県南部に震度Ⅴを与えた地震）

南　海　沖		東　海　沖
684年11月29日（M＝8.4）		
※ 887年8月26日（M＝8.6）		
1099年2月22日（M＝8.6）	約2年 ←	1096年12月17日（M＝8.4）
※1361年8月3日（M＝8.4）		
		1498年9月20日（M＝8.6）
1605年2月3日（M＝7.9）		
※1707年10月28日（M＝8.4）	同　時 ←	1707年10月28日（M＝8.4）
※1854年12月24日（M＝8.4）	32時間 ←	※1854年12月23日（M＝8.4）
※1946年12月21日（M＝8.1）	約2年 ←	1944年12月7日（M＝8.0）

近畿地方に多い活断層 いつ発生するかわからぬその恐怖

ジャーナリストが作った言葉で直下型地震というのがありますが、これは今までお話した海底地震と違って、我々の住んでいる大陸地殻内で起こる地震ですから、被害も大きくなります。この地震の原因は活断層のどれかが再び突然活動する時の衝撃に他なりません。また活断層の運動は同じ方向に繰り返し起こりますので、断層の長い間の動きを調べればそれがどの程度に活動的であるかが分かります。ただ、ある一本の活断層が地震を発生させる間隔は千年から二千年とたいへん長いので、最近いつ地震を起こしたかの記録が不明のことが多く、このためどの断層が次に地震を起こすのか、判定しにくいのが実情です。図—七に示されたように、近畿地方は日本中でも最も活断層の多いところですし、阪神地区のすぐ近くの六甲山地にもこんなに沢山の活断層が発見されているのです。これらの一本一本がみな地震発生の"容疑者"なのですが、残念なことに、犯罪経歴がつかめていないために、どれが次の犯罪を起こすか分からないというのが実情でそれだけに、大変不気味です。

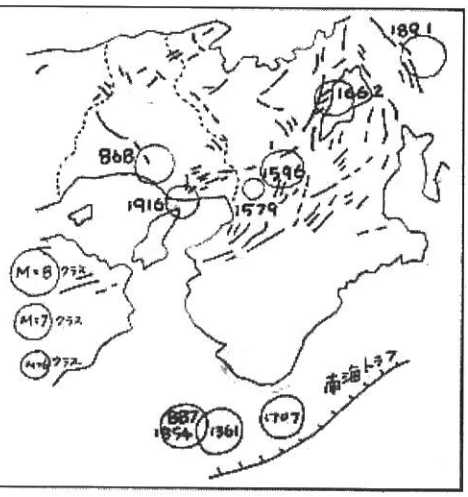


図7　阪神地区に震度Ⅴ以上を与えた地震の震央分布と、近畿地方の活断層の分布図（数字は各地震の発生年を示す）

避難所に、町に、連帯感

▲もちつき大会で、子どもたちもひとときを楽しんだ(北夙川小)

学生の若い力が支え

上ケ原小学校は校舎の三分の二が損壊しましたが、被難者千人ほどが集まりました。この朝、日スポ指導員らが来ていたのが幸い、開門してまず体育館へ誘導しました。段上町の自宅が全壊。ようやく脱出した田澤弘史教頭は七時半学校へ着きました。まず避難者代表と会い対策を練りました。夕方パン百個が届き、子どもに優先配布しました。体育館二階の観覧席まであふれる窮屈な生活でしたが、避難者に混乱はありません。

三日目から関学ボランティア委員会から一日平均二十人が来てくれました。中には長期間頑張った学生も何人かいます。トランシーバー、携帯マイク持参で、これが活動の大きな助けになりました。次いで門戸厄神から高野山大学のボランティアも到着、東京、島根の人も参加し、学生が食事関係をほとんど最後までやってくれました。避難者の若い人（学生）も協力します。名簿づくり、ゴミ捨て、生活用水、トイレ水の補給、玄関に常駐してポットを用意し二十四時間サービスを続けてくれました。

防火水槽が壊れ、当初は水には困ったが、米は給食用保存米があり、電気ガマで炊き、おにぎりを仁川学院の避難者にも届けました。廃材、ガスボンベを活用、温かい食べ物に恵まれたのはボランティアの力に負うところが大でした。

避難者も連携活動

瓦木小学校の校庭が避難者の車で埋め尽くされました。一月十九日にはボーイスカウト有志がボランティア活動を始めました。一月～二月中旬の食事や物資配給に追われているころ、さらにボランティアに来校する人が増え、心強く思いました。しかしライフラインが順次回復する三月中旬以降その人数が減ってきました。そこで避難者自身も協力して危機を乗り切りました。

ボランティア活動を通し、人の心と触れ、多くの事を体験しました。その中には今後生かせることが多くあります。

六月二十五日、もう誰もいなくなった学校へ集まり、最後の掃除をしました。避難所として頑張ってくれた古い学校に感無量の心境です。

各所で心の活動が

避難所でのボランティア活動だけでなく、被災地の各所での助け合いはほとんど無数でした。近隣のためのトイレ水の確保、一人暮らしの高齢者の家の屋根のシート張り、家財搬出（用海地区からの報告）など、誰もが労を惜しまず、助力を傾けたのです。各地区から駆けつけた学生ボランティアたちの中には、むしろ被災地の人の心に触れ、貴重な教訓と経験を得て帰っていったものも少なくありません。

六月に復刊した宮っ子にも、ボランティア、助け合いに対する感謝の思いが載せられています。

「心の温かい方々との触れ合い」（今津）「地域の人の助け合いの原点を見た」（越木岩）「献身的なご協力、小学校の先生方、市民館の人に感謝」（苦楽園）「助け合い、我慢。人の心のやさしさ、自分の力がわかった」（安井）「井戸水を提供してくださったご家庭、全国の援助」（浜脇）「人間愛に基づく奉仕団体の活動に感謝」（夙川）「顔も知らなかった人が声を掛け合い助け合い、いたわりあった」（大社）「共に生きることの大切さを味わいました」（香枦園）。

とりわけ印象深かったのは若者の活躍でした。「県民運動の情報誌ネットワーク」に、その活動ぶりを讃えた一文があります。

「他人を思いやる気持ちに欠けるといわれる現在の青少年の心に、やさしさ、思いやりはしっかりと育っていた。そして彼らの若さや元気さ、パワーが大人たちを勇気づけ、復興へのエネルギーとなっている」と。

消防団の"熱き心"

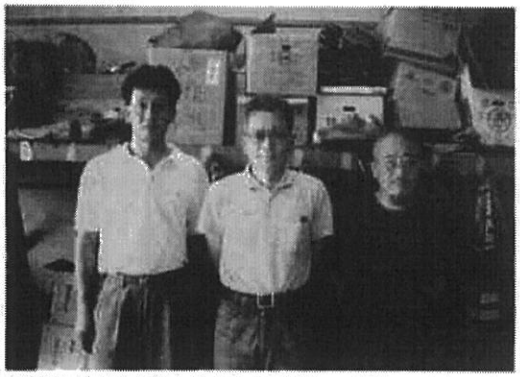
記憶に止めておきたい一つに、消防団の活動があります。公には市民局に属し非常勤の特別公務員の肩書こそありますが、実質は一般市民です。市内三十三分団（七百三十一人）のうち、震災によって団員二人が亡くなり一親等の家族十六人を失いながら、残りの人が全市で働きました。

初日は地元で、次いで消防署の指揮下に入り、火災、救出、給水などに全精力を投入。北部、鳴尾の分団員は市内激甚被災地へ応援に出動しました。わが家を顧みず、市民に助力を尽くした行動には心から敬意を表したいと思います。

「われわれはやるべきことをやっただけ」と木嶋巌・西宮市消防団長は淡々と話されますが、各ポンプ車の走行距離は二月二十日まで三千～四千キロメートルと、実に平常の十年分に相当し、その活動状況は超人的というべきでしょう。

高木分団（古塚貞雄分団長）では分団員十九人中十八人の家が全壊、四人の家族を失いました。古塚さん自身も一時間生き埋めになったが、娘さんがホースを握って消防活動に従事。OB数人も駆けつけてくれました。消火は成功、続いて三日間は人命救助へ。ケガ人は市立中央病院へ。高木公民館に運んだ遺体も多かったが、近所の若い人が男女を問わず救助作業に協力してくれました。

その後は泥棒の警戒、そして給水へ。一トンのタンクを消防車に積んで鯨池浄水場から地域二十六カ所へピストン輸送、夙川、苦楽園にも向かいました。給水活動が終わると深い虚脱感に襲われたといいます。分団員は三分の一が農家、他は自営とサラリーマンです。活動中、苦情もいわれたが消防団員は「命を張っている」ハッピ姿の市民ボランティアだと、高い誇りを持っています。



▲半壊した高木分団で、和久さん、古塚さん、酒井さん（左から）

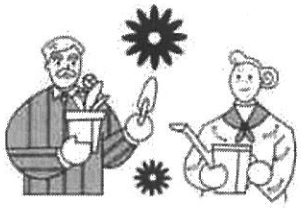
また、市南部を応援した山口町中部分団の北浦治分団長は次のような記述を残しています。

「救出現場は言葉等で表現できるものではありません。……小さいポットを持って水を入れてくださいというおばあちゃん。家まで行き大きい入れ物に入れてあげた。おばあちゃんは何度も頭を下げ、消防の方ありがとうといって手を合わせていました。あの姿は今も覚えています。消防団員であってよかったと、思い出すと熱いものを感じます……」。

修羅の巷にあっても、このやさしい思い－これが消防団員の心ということができます。

今後につなぎたい

書き綴ってきたボランティアの記録。さまざまな奉仕をした商店の人や、職務外のボランティア活動をした学校の先生たちなど、書き尽くせぬ事はまだたくさんあります。そしてその活動が残した教訓、心を今後復興に、また新しいまちづくりに是非とも生かしていきたいと念じています。

うけとり上手
定期預金
"くらし"を考えるかんしんから
満期日を待たずにお利息が受け取れる
利息分割受取型が誕生。
●お利息受け取りサイクル
2ヶ月ごと、6ヶ月ごとのどちらかをお選びください。
★詳しくは、窓口でご相談ください。

kansin ふれあいウェーブ――ベイシティバンク 関西西宮信用金庫
本店 〒650 神戸市中央区下山手通2-12-3
☎078(332)5151㈹

●●●『宮っ子』復刊までの足どり●●●

新年号を発行した後、阪神・淡路大震災のため、3月号～5月号を休刊としました。今津などその間独自で発行した地域もありましたが、その後は6月号を全市版のみで発行、7月号を23地域で、8月号からは通常通り25地域での発行となり、『宮っ子』の完全復刊となりました。

各地域の事情を追ってみました。

今津地域では

平成7年3月、阪神・淡路大震災のわずか2カ月後、『宮っ子』地域版を発行した数少ない地域の中でも、今津地域は回覧形式で3月・4月・5月と全3号発行していました。

この地域は過去に休刊した経緯があり、それを取り戻したいという思いから編集長と数人の編集員が連日地域を回り、取材を続けました。

震災特報第1号は、避難所の住所、電話番号、収容人数、被害状況、死亡者の氏名、町名、倒壊家屋の町名や軒数が記されています。救援物資が届くまでの3日間、地域の善意ある人々からのおにぎりの差し入れや炊き出しが続けられており、その様子が詳しく記載されています。

第2号では、仮設住宅の場所や戸数が記され、縮小しつつある各避難所の様子が書かれています。復興を願って開催された三世代交流餅つき大会の記事は心温まる一コマです。また、廃材の山やアスベストの対策として、正しいマスクの着用のしかたなど、細やかな情報も多く見うけられます。

第3号では、震災から100日余りたち、地域が落ち着きを取り戻した様子を伝えています。対策本部に届いた多くの救援物資について、その品名や氏名の紹介が日付ごとに4ページにわたって詳しく記載されています。

この3部の震災特集号は、現在も地域の記念式典の時などに再配布されています。

今津地域で発行された震災特集号

甲東地域では

震災当時、地域版の復刊はすぐには無理という意見も出ましたが、皆さんとの話し合いで前向きに考え、「7月号からやっていきましょう」ということになりました。

『宮っ子』としては、震災の記録を残すことが役目…。そのうち風化していくかもしれないので、地域の被害を、ちゃんと残しておきたいと

崩れた新幹線の高架（上大市付近）

『ぶらりみてある記』でおなじみの伊藤太一先生。震災後3号にわたって「震災のつめあと」と題した伊藤先生のイラストが『宮っ子』に載りました。当時の思いを寄せてもらいました。

「宮っ子」の形容しがたいほどのすごさ、あばらしさを感じました。
「描くのつらかった？」と言ったことを覚えています。
公用車で助手席を回りました。
歩きました。
思慮のない駅前、街角の痛々しい修羅場のような
情景…　錯覚かもしれないと思うような気持で
言葉も、声も出ない思いでした。
資料をいちばん、絵の構図を頭に描きました。
記録のクロニキーとしてまとめてみました。
賛否はともかく作業を進めました。
あの時の間のあの衝撃で寝床をはずり回った
恐怖心が体の中によみがえりつつの筆運びでした。
反面、人間の心の美しさ、温かさ、生きる力を学びました。

引越も保管も押入れ産業におまかせ下さい！
お年寄りの方には“急がず”“ゆったり”としたスケジュールで作業を行います。
●増改築の家財の一時保管に　●季節の衣替えに　●冷暖房器具の収納に
●引越しで家財が収まらない　●海外転勤で家財の保管に
●捨てられない子供用品・コレクションの保管に
トランクルームの押入れ産業
(0120) 47-0410（シナモハオシイレ）
西宮店 神戸東店 西宮配達商事㈱
TEL0798-43-9902
http://www.oshiire.co.jp/

思い、震災直後から写真を撮ってまわることにしました。

「悲惨な状況のなかで写真を撮ることは心が痛みましたが、復興に向けてその記録を残すことが必要と思い、自転車に乗ってカメラを隠すようにして町の様子を撮りました」と当時の江崎ゆう子編集長は話しています。

苦楽園地域では

震災があった1月17日、苦楽園地域では『宮っ子』3月号の編集もすでに終わり出稿していましたが、震災によって発行は中止となりました。

しかし、『宮っ子』によって情報を伝え、記録としてとどめておくべきだという編集員の熱意によって、5月号から地域版独自の発行を決定し、各自治会長や小・中学生、地域の皆さんの協力を受けて印刷屋さんに頼んでB5判、4ページを発行、自治会ごとに各家庭に配布し喜ばれました。

亡くなられた人のことを掲載したときの辛さを覚えています。

私も仕事を休むことができず、電車は西宮北口までしか通っていなかったので大阪に仮住まいをしながら、休日には戻って後片付けや取材編集をするなど、大変だったことが思い出されます。

震災直後、水道が停止、3日目になって北夙川小で給水開始、山道で車もない高齢者は困難を極め、トイレの水は中新田川の水を利用しました。震災によって地域の協力の大切さが認識できました。

（苦楽園地域編集長　戸城健次　記）

平木地域では

阪神・淡路大震災により、全市いたるところ何もかも壊滅状態、私たちの平木地域でも『宮っ子』発行のメドは立ちません。

中でも、地域版「ひらき」は沢村編集長を失うという痛手を受けました。再び編集の仕事が私の方へ。

そのころのことを思うと、次のようなシーンが…。

春めいてやわらかい陽光をあびて私は、平木通りを東から平木中学の方へ役所の宮っ子担当者と歩いていました。

何を話したのか定かではありませんが、多分いつから出せるか、そんなことでしょう。

ふと目をやると純白の花、ハクモクレンでした。あんなにすごい災害があって、まちの人は散り散りになったのに、花は時期になるとちゃんと花を咲かせる。

とても当り前のことですが大きな感動を覚えました。そして生命のはかなさと同時に強さを知りました。

『宮っ子』が誕生して30年、長いようで、短い。短いようで長い。時間というのはまことに不思議なものだと、つくづく思っております。

（平木地域元編集長　樽本清　記）

皇后さまの両手は温かかった

被災者を見舞われる天皇陛下と皇后陛下

震災2週間後の1月31日、天皇陛下と皇后陛下が避難所の西宮市立中央体育館で被災者を見舞われました。

寒さの中スリッパもなしで広い館内を一人一人に声をかけ、励ましてまわられました。その中で、思わず自然に「皇后さま！」と声が出てしまったのは、大社町の福岡康子さんでした。すぐにかけ寄って、やさしく手をとってくださいました。「被災直後の不安いっぱいの中で、両手のぬくもりに勇気と安らぎをいただき、ただ涙がとまりませんでした」と話しています。

「皇后さまののどの具合はいかがですか？」とたずねると「私のことはいいのですよ、どうぞみなさんからだを大切に、元気を出してくださいね」と答えられたそうです。

被災者の心の中に温かい余韻を残し、体育館をあとにされました。

お悩みのご相談、お任せください。
（借金問題・多重債務）

相談無料
費用分割可
不動産登記
商業登記
訴訟・・・
専門相談員多数在籍しています。お気軽にご相談下さい！相談無料
あさひ司法書士事務所
Asahi Judicial Scrivener Office
詳細はwebで　あさひ司法書士事務所　検索　www.asahi-office.com/
06-6345-0070
無料電話相談受付／10:00～22:00まで（平日・土・日・祝日対応）
当事務所では、毎日多くの方がご相談されています。

大阪市北区堂島1-2-2 日総ビル3F
JR北新地駅 徒歩約6分

今津

NO. 72〔震災特集号〕

編集・発行
今津コミュニティ編集委員会
事務局
西宮市今津二葉町4-49
36－0049

阪神大震災

不幸にもお亡なりになった方に哀悼の意を表します。
大勢の被災者の皆様に心よりお見舞申上げます。
今津連合福祉会／今津コミュニティ編集部

新年の諸行事をようやく終え、未だお正月気分の抜けきれない一月十七日未明、かって経験したことのない大地震が突如私たちに襲いかかってきました。

後に掲げますが、この地震により、当今津地域で今までに判明しているだけで十七名の死者があったのを始め、倒壊した家屋の下敷きになり大勢の方が負傷されました。

【必死の救出活動】

これだけの大惨事にもかかわらず、他の地域に比べ死亡者数が少なかった陰には、

① 災害発生直後、近隣の人々が声を掛合い、消息不明者の掌握を手早くされたこと。

② 消息不明の方々の捜索救出活動を、身の危険、自宅の被害を顧みず"近隣の人達や地元今津消防団"が、献身的かつ機敏に進められたこと。

言うなれば、日頃のコミュニケーションの良さの表れだと思われます。

不幸にも、この救出活動の甲斐なく亡くなられた方々に謹んで哀悼の意を表します。

【対策本部設置】

今回の災害は、火災・水害等と異なり、内容に大小の差はあるものの、地域全員が被災者という、地震特有の災害でしたが、余震の収まらぬ中自宅の被害を後手に回し駆け付けられた、今津小学校金谷校長始め教職員・今津連合福祉会（自主防災会）役員により午前八時に、マニュアル通り対策本部が設置され活動が始められました。

【避難所開設】

直ちに、竣工したばかりで未だ使用されていない同校体育館に応急避難所を開設、被災者の受け入れが始められました。

更に、被災者の増加に備え暖房設備のある公的施設を探し、次々に避難所を開設しました。

避難所の所在・収容人員は次の通りです。

当初総数八〇〇余名を数えましたが、その後次第に減少し、二月九日現在の人員は次の通りです。

①今津小学校
今津二葉町四ノ一〇
☎三三・〇九二三
（九六名収容）

②今津研修センター
今津二葉町四ノ四九
☎三六・〇〇四九
（八一名収容）

③今津中学校
今津二葉町五ノ一五
☎三四・六六二二
（一三四名収容）

④今津育成センター
津門住江町一一ノ一七
☎二三・一二八五
（一三名収容）

⑤今津公民館
水波町九
☎二二・三五二九

⑥津門川ポンプ場
津門川町六ノ二一
☎二三・四九〇五
（三八名収容）

⑦市福祉会館
染殿町町八ノ一七
☎三四・三三六三
（二九名収容）

⑧巽町集会所
今津巽町五
☎　なし
連絡は森福祉会長宅
☎三四・七九七二
（九名収容）

⑨網引市民館
甲子園網引町
☎四一・四八二五
（五名収容）

⑩南市民館
今津出在家町一〇
☎二二・四八九二
（七名収容）

⑪文協保育所
水波町一一ノ二六
☎二二・三三二〇
（八名収容）

なお、当初、真砂中学校や津門川地区でフジッコ㈱も避難所として提供されておりました。

【炊き出し】

早朝の災害で、避難者も救援の人々も食事をまったくしていない状態で、当然応急食の備蓄もなく、どうするかを検討中、まず最初に民生委員の武庫さんから、自宅にあるだけを炊いたと、おにぎりが届けられました。

学校でも、炊飯を試みましたが電気釜がなく、当時未だガスが通っていた真砂地区へガス釜を持帰り炊飯を始めましたが、ここでもまもなくガス切れ。初日はこれら、約二百個のおにぎりを分配するに止まりました。

二日目、中久寿川福祉会山本会長から、餅つき用のかまどと釜三基の提供があり、小学校の給食用米六〇㎏を近くの田淵工務店の井戸水、倒壊家屋の木材を燃料にして炊出しが始まりました。

更に、今津連合福祉会からも、米二百㎏を提供。福祉会役員、婦人会、せいねん会議青愛協ほか、大勢の協力により、市からの救援食料が本格的に届くまで、三日間炊出しが続けられました。

いち早やく取組んだ炊出し風景

その後も、このかまどで湯茶や、インスタント食品用の湯を提供し続けています。

燃料として、南久寿川の大憲工業（呉山社長）から、ダンプ三台の木材が搬入され、薪用に切り出して帰られたことも忘れられません。

【被害状況】

現在、本紙編集部でも、救援活動の合間を縫って、家屋の被害状況、地域外へ避難された方の行き先などの調査を進めておりますが、現在までに判明している主な状況は、

① 死亡者

《津門川町》

有馬　英雄さん　(53)
池崎　登義さん　(56)
上田　ます枝さん　(61)
小野　雅子さん　(23)
金　日守さん　(61)
呉山　幸江さん　(46)
坂井　末尾さん　(84)
福井　武義さん　(57)
松本　美穂さん　(20)
前田　重幸さん　(28)
村上　満子さん　(67)